緑爽会会報　No. 166

2020年2月25日発行
日本山岳会　緑爽会
発行人　富澤克禮

デザイン･制作　関塚貞亨

～～《報告》～～～

と繁殖率は関係しており、２０１９年は凶作だったので産卵がどうかとのことだった。山ブドウに関しては、それを摘んでワインを作っていると、２０１５年物、１９年物の２本を持ってきていただき、後の忘年会でいただくことができた。写真も５００ミリの望遠を手持ちで撮られるということで、飛翔する美しいイヌワシの写真をお見せいただいた。自分の撮ったものはプレゼントするとおっしゃられたのであっという間に手が伸び、なくなってしまった。観察、調査という目的をライフワークとされ、山に親しんでおられる佐藤会員をうらやましく思ったことでした。（尚、前回のお話は会報１２４号に詳しく載っています。また当日の資料一式は１０４号室内の緑爽会倉庫に保管しておりますのでご覧いただけます）　（荒井記、写真：小泉義彦）

夏原寿一　西谷可江　渡邊貞信　西谷隆亘　近藤岳彦　梨羽時春　瀬戸英隆　山川陽一　石井秀典　小林敏博　荒井正人　小泉義彦

石塚嘉一　川口章子　藤下美穂子

渡部温子　島田稔　川嶋新太郎　松本恒廣　佐藤淳志　富澤克禮　近藤緑　深田森太郎

１月初詣山行「子ノ権現」

小林　敏博

実施日：１月１０日（金）
参加者：１０名（渡部温子、鳥橋祥子、島田稔、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、
　　石塚嘉一、荒井正人、小林敏博）

今年の初詣山行は干支の「子年」に因み、奥武蔵の「子ノ権現」を訪れた。冷たい風の吹く寒い一日だったが、抜けるような青い空が終日、広がっていた。

集合時間前には全員が吾野駅に集合、可愛い焼きお握りや羊羹が皆に配られ小腹を満たしたところで歩き出した。駅前を緩やかに下って法光寺手前を左に線路をくぐり抜け、線路に沿った道を２５分歩くと東郷公園・秩父御嶽神社に着く。冷えた体もようやく温まったので衣服調節し、新しく建てられた里宮遙拝殿に参拝する。ここからは青場戸川左岸の舗装道を緩やかに登っていく。霧が多いせいか、川の上に伸びた枝にはサルオガセが延々とぶら下がっていた。舗装道だが、路傍の古い馬頭観音が古道の雰囲気を醸し出している。そろそろ疲れてきたところで浅見茶屋が現れ、茶屋の前で一息入れた。

茶屋からやや急坂の舗装道をひと登りすると、降魔橋に着く。脇に子ノ権現から十二丁目との石碑があった。橋を渡ると山道になる。古い石の階段が続く。段差はそれなりにあり、ゆっくりと登

っていく。途中の小休止では、配られるドライフルーツ、チーズや飴などが疲れを癒やしてくれた。道はやや急坂となりジグザクと登ると、目の前に舗装道が不意に現れる。子ノ権現の駐車場に続く道だった。舗装道を横切りさらにひと登りすると、樹齢およそ８００年といわれる二本杉に着く。

二本杉から広い参道を鳥居、黒門、朱色の仁王像の間を通って子ノ権現本堂へ。皆さん、お賽銭を投げ入れてそれぞれ願をかける。さらに本堂裏手から奥の院へ登って、見晴し台から東側が大きく開けた展望を楽しむ。都心のビル群やスカイツリーもくっきりと眺めることができた。「東京タワーも見える。」との声に、皆は「どこどこ？」と目を細めて探す。

昼食は子ノ権現を竹寺方面へ数十mほど下ったところにあるベンチでとる。先に宴会を始めていた中高年グループが席を譲ってくれた。細長いテーブルに１０の皿が並べられ、渡部さんお手製のエビチリ、鶏の唐揚げ、数種類の野菜のサラダ、石塚さん提供のミカンが盛り付けられた。“恒例”の八海山の甘酒が富澤さん、荒井さん持参のバーナーで温められる。北側の斜面が冷たい風をさえぎり、暖かな冬の陽だまりの中で豪華な午餐を楽しんだ。出発間際、落ち葉の間から伸びる１本のハハコグサが黄色の花を付けていた。温暖化の影響かと、富澤さんが高尾山でタツナミソウが咲いていたことも付け加えた。

下山は小床口参道コースを西吾野駅へ向かう。二本杉まで戻り、舗装道を吾野駅への道標を過ぎてさらに少し下ると、西吾野駅への道標がある。杉林に囲まれたしっかりとした山道を下っていく。天寺十二丁目石のある峠ノ前で一休みしてさらに下っていく。やがて勾配も緩やかになり、石のゴロゴロした細い枯れた沢のような道を歩くようになると、じきに小床の最奥の集落脇に出た。ここからは舗装道となり、無事に西吾野駅に到着した。

反省会は、都合のある荒井さんと田井さんを除く８人で、飯能駅前にある、島田さんがご存じの中華店で催す。飲み物１杯につまみ３皿のお得なセットを注文すると、テーブルに並べられないほどの料理が出てきてびっくり。安い料金で十分楽しめた。

（参考）行程記録

吾野駅 9:30→9:55 東郷公園・秩父御嶽神社 10:05→10:45 浅見茶屋 10:55→11:25 登山道で休憩 11:35→11:50 二本杉→12:00 子ノ権現（昼食休憩）13:20→13:25 二本杉→14:00 峠ノ前（天寺十二丁目石）14:10→14:40 小床集落→15:00 西吾野駅

＊＊

ところで、今回の初詣山行は当初、子ノ権現から竹寺を経て名栗車庫に下りる予定だった。１２月上旬に下見をしたのだが、事前に豆口峠～竹寺間で先の台風により登山道が崩落、通行止めとの情報があったので、コースを豆口峠から直接、名栗車庫へ下りるコースに変更した。吾野駅からのルートを取ると、豆口峠～名栗車庫間で登山道が崩落して通れない場合、吾野駅まで戻らねばならないので、下見は名栗車庫から逆コースを歩くことにした。

下見当日、名栗車庫から豆口入林道を５分ほど進むと林道が崩落していた。林道を外れて山の斜面を直登する新しい踏み跡がわずかにあったので、そこを４０～５０ｍ登ると、再び林道に出た。そのままさらに５分進むと、通行止めのロープが張られていて、その先の林道がごっそりとえぐられ、かなりの本数の木々が崩落した跡に横倒しとなっていた。急斜面の高巻きも危ないので、名栗車庫まで戻り、竹寺経由で子ノ権現へ向かった。竹寺～豆口峠間で１カ所崩落していたが、無事に子ノ権現に着くことができた。富澤さん、荒井さんと昼食をとりながら相談した結果、子ノ権現～竹寺のコースは歩行時間が長いこともあり、初詣山行の下山は西吾野駅にしようと決め、西吾野駅へ下山し、その山道に問題ないことを確認した。下見がいかに大切であるかを改めて感じた次第である。

崩落した豆口入林道⇒

初詣山行に参加して

石塚　嘉一

１月初詣山行で、奥武蔵の子ノ権現に行った。ほかに誰もいない吾野駅に１０人が全員集合。渡部さんと田井さんから早速おやつをいただいて出発。高麗川を下の方に見て、子ノ権現への登り口にあたる東郷公園へ。そこから、舗装道路のゆるやかな上りを歩く。１時間足らずで、ちょっと息が切れたころ、安政２年の古民家だという浅見茶屋の前で休憩した。手打ちうどん（飯能うどん）が食べられるという。次は立ち寄りたい、と思いながら歩きだした。すぐ先の滝不動から山道が始まった。我々には、なかなかの急登だ。いつものように、小林さんの先導で、リーダーの夏原さんがしんがりで、ジグザグに登っていく。ところどころに「関東ふれあいの道」の標識があって、こんなところも「かんふれ」が通っているのだと思う。１月なのにちょっと汗ばむ頃、１時間ほどで、日が入らない山道から、舗装された参道に出た。

樹齢が推定８００年、埼玉県指定天然記念物だという二本の大杉をしばしながめて、やっているのかいないのかわからない店で、みんなで食べようと、みかんを買った。赤い鳥居をくぐって山門に向かう。鳥居は、神仏習合の寺だということを示している。山門の柱には、天台宗天龍寺とあり、大鱗山の額がかかっている。大鱗山天龍寺が子ノ権現の正式名称なのだ。山門をくぐり、本堂に着いた。駅から２時間半かかった。古より足腰守護の神仏として霊験あらたかというので、みんなは、それぞれ真剣に願い事をしながら拝む。境内には、重さ２トンという大きな鉄のわらじが奉納されている。本堂の裏の山の上に鐘楼があって、ここが頂上だというところに上った。大持山方面が展望できるということだが、よくわからなかった。見慣れた大岳山は遠くに見えたのだが。われわれのほかにはだれもいなかった。小さな札に「経ヶ峰６４０ｍ」とあった。本堂の前に下りてきてみんなで記念写真を撮った。

寺務所のすぐ下の、竹寺へ行く広い山道にベンチがいくつもあって、昼食にすることになった。先客の男女のグループが既に食事をしていたが、使っていたベンチとテーブルの一つを我々にゆずってくれた。渡部さんが前日から用意された手作りの料理の数々をテーブルに広げて、一人ひとりに取り分けてくださった。さっき買ったみかんをサラダにのせて、豪華な食事が始まった。その間に、手分けしてザックに入れて上げてくださった甘酒が温められ、マイカップでいただいた。とな

りの先客のグループにも気前よくふるまった。この日参加予定来の１２人分を持ってきたので、きっと重かったにちがいない。その分、疲れたからだに甘酒は格別に甘かった。ご馳走さまでした。真冬なのに、陽だまりでポカポカして、防寒具やアウターのウエアを脱いで、１時間ほどゆっくりくつろいだ。至福のひと時でした。帰りは小床口参道コースの山道を下って西吾野駅に出た。

～《寄稿/投稿》～～～

幻の「銀山平探検記」

吉田　理一

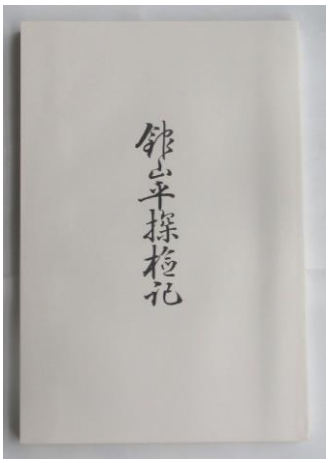
奥只見郷ネイチャーガイドをしていた時は、いつも奥只見湖上を渡って尾瀬口に到着するまでの船上で、湖底に沈んだ銀山平に思いを馳せていた。その銀山平の探検記があると知って手を尽くしたが、明治時代に発行された現物は未だに見たことがない。ここでは復刻版を元に紹介する。

1. **銀山平の位置**～新潟県湯之谷村(現魚沼市)の奥地、現在は電源開発により作られた巨大な人造湖「奥只見湖」の湖底１５０ｍに沈んでいる。

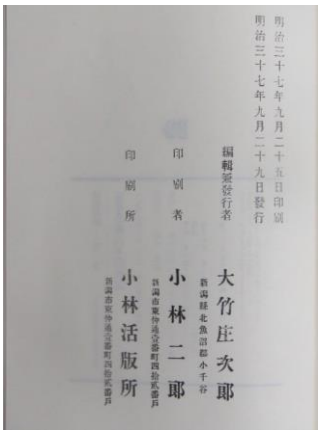
2. **銀山平の歴史**～１６４０(寛永１８)年、只見川で銀の鉱石が発見され無人の原野がシルバーラッシュと化し一大鉱山町となった。以来１８５９(安政６)年に閉山されるまでの２２２年間にわたり佐渡金山とともに江戸幕府の財政を支えた、その後は無人の原野に戻っていた。

3. **明治に入り開墾**～桑畑は比較的よく育ち明治８年には出作り小屋が１４件あった。
明治４３年、銀山拓殖(株)が設立され、定住する入植者の募集が行われた。地元新潟県内から約２０戸、福島県檜枝岐村から約１０戸の応募があった。

4. **銀山平探検隊**～明治３４年北魚沼郡役所の発意で探検隊を組織。開墾・牧畜・養蚕・川魚・林業などの産業の現状を調査することを主目的とした。隊員３２名、案内人１１名、人夫１７名の大探検隊であった。



5. **銀山平探検記**～明治３７年、大竹庄次郎編集発行。
「書痴」の異名さえ付けられた小林義正著「山と書物」１９５７(昭和３２)年（築地書館)に紹介されている。昭和５８年巣鴨駅近くの山岳古書店「中央堂書店」の小野敏之さんに尋ねたところ１０数年前に一度２０数万円で古書市に出た事があるがその後は全く出ていないとの事だった。小林義正氏の蔵書は小谷隆一氏を経て信州大学山岳図書館に寄贈されているとの事であるが「銀山平探検記」も信州大学に保管されているかは未確認である。



6. **復刻版刊行**～探求していて入手出来ないうちにベースボールマガジン社から１９９０(平成２)年復刻版が出版された。同社の当時の社長池田恒雄氏は魚沼市のご出身であり私の高等学校の先輩でもある。出版の意図は不明であるが採算が合う企画とは思えず、何か地元に貢献したいという思いからかもしれない。復刻版は三部からなり「湖底幻影」と題して立派な函入りの豪華な仕上がりとなっている。
　第一部～銀山平探検記の復刻版
　第二部～銀山平探検記の現代語訳版

第三部～銀山平を取り巻く山々
木暮理太郎・高頭仁兵衛・三田幸夫・渡辺公平・藤島玄・川崎精雄他の先人の紀行文を紹介している。
また、第三部には以下の小出山の会会員3名(3名とも日本山岳会越後支部会員)も案内文を載せている。

櫻井昭吉　会員番号　　５０２１番
井口拓夫　会員番号　　５０９３番
松原良一　会員番号　１０４３６番

7.　**出版記念会**～ベースボールマガジン社から１９９１(平成３)年５月１１日(土)、湯之谷村(現魚沼市)大湯温泉東栄館での出版記念会の案内をいただいたが、当時は勤務先が新潟市内で、あり、週休二日が実施される前で土曜日は午前中勤務（半ドン）があった。参加出来なかったことは残念であった。

武蔵野を歩く

小原　茂延

長いこと山歩きを続けてきたが、喜寿をもって一応卒業ということにした。
人によっては、８０歳までは登りたい、あるいは歩けるうちは山に行きたい、といったご仁も多い。元会長の斎藤惇生さんなど、卒寿を越えて登山を続けていると支部報で読んだのは昨年初めであったか。さすがに伝統の山岳会、トレーニングの賜物か、達者な足腰の方々に感心するばかりである。数多くの山の紀行文や随想などを書いた串田孫一は、少年の頃から槇有恒などに登山とスキーを習ったそうだが、戦争で中断、再開後も脊柱管狭窄のような症状が出て、５０代半ばくらいで山行を終わっている。深田久弥にしても百名山選定の自身で登っていない山を地元の岳人に案内を受けながら登る際に喘ぎながらとか、厳しいといった表現が垣間見られるのだが、年齢的には６０代前半の頃かと思われる。

昨秋、武蔵野の俤を残す庭園で当会の富澤代表とばったり出会った。国分寺にある日立中央研究所の庭園開放日でのことだ。この庭園は、年に春秋各１日の指定した２日のみ一般に開放しているのだが、かなり以前から来ようと思っていながら、つい日にちを確認しなかったり、忘れていたりで実現していなかったのだが、その何年かの１日に偶然の奇遇であった。富澤さんは登山や海外トレッキングも盛んに行かれている一方、自然保護活動も積極的に指導しているので、この日もグループで歩かれていた。園内は武蔵野の自然をそのまま残すといったコンセプトで管理されているのがわかり、ケヤキやヒマラヤスギの大木が天を突き、コナラやクヌギ、イヌシデなど武蔵野の雑木林を形成している樹種が豊富である。カエデその他の紅黄葉もはじまっており、十月桜が花をつけている。湧き水が数個所あって流れとなり大池に注ぎ、池からは流出口の水門で調節されて野川の主要水源となっている。

国分寺駅に戻り、南口の殿ヶ谷戸庭園を右に見て(ここも湧き水の池を有して紅葉が見事)直進、東京経済大学の構内低地に新次郎池がある。元学長さんの名を付したそうであるが、小さいながら緑陰の湧水が綺麗である。流れ出た辺りで同じく武蔵野の池を歩いてきた方と会話を交わした。私は野川に沿って下り、川面を眺めていると高浜虚子の武蔵野吟行などの句が思い浮かんでくる。「流

れゆく大根の葉・・・」などと思っていたら、丁度、くだんの葉が瀬の中の石に引っ掛かっているのが見え、思わず苦笑した。

ほどなく「はけの森美術館」に着く。美術館は元、中村研一美術館と称していた頃にハイキング仲間と立ち寄ったことがあり、今回は伊東深水展が催されていた。山岳会のＫさんがいると聞いていたので、展示のことや先頃の連絡会議の感想などを伺った。

山歩きに偏っていた傾向が強かった中高年を過ごしてきたが、最近は山の文化への興趣を主とする方向へ舵を切り、文学・美術・博物関連のことをより深く知りたい、味わいたいと願うようになってきている。山を多様に楽しむという姿勢は相変わらずであるが、その所産を若き人たちへの伝承に努めることも忘れてはいけないと思うこの頃である。

～～《予告など》～～～